

主の洗礼 (ルカ 3:15-16,21-22)

水に触れたイエスが、私たちに触れてくださる



昨年、洗礼を受ける機会が何度かありました。本当に有難いことでした。洗礼式の中で、中田神父は水の祝福をおこなってから洗礼を授けます。儀式書の言葉を唱えて水を祝福するのですが、祝福の祈りの途中次のように唱えます。「いのちの与え主である神よ、この水を†祝福してください。」

水の入った器に手を差し伸べて唱えますが、私は水に少し触れることにしています。儀式書には手を差し伸べることだけ書かれていますので、厳密には不必要な動作です。ただ、「触れる」という動作は、洗礼式の参加者にも伝わりやすいと思っています。ちなみに復活徹夜祭で水を祝福するときは、復活のローソクを水に浸して唱えます。「復活したキリストが水に触れる」という象徴的な動作です。

今日、主の洗礼の祝日です。イエス様がヨハネの洗礼をお受けになったことで、水はイエス・キリストに触れました。イエス・キリストの御生涯全体に触れたと言ってもよいでしょう。「彼は飢えますが、無数の者を養い、労苦しますが、労苦する者たちを休ませます。枕するところもありませんが、すべてを手ずから担われます。苦難に耐えますが、苦難から立ち直らせます。むち打たれますが、世に自由を与えられます。わき腹を刺し貫かれますが、アダムのわき腹の傷を治します。」(毎日の読書・公現後の火曜日)

私たちも、水を用いて洗礼を授けてもらいました。その水は、洗礼のたびにイエスによって祝福され、いわばイエスが触れた水になります。私たちは、ヨハネが証しした「聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」このイエスによる洗礼を受けた人です。

「聖霊と火で」お授けになると洗礼者ヨハネは証ししましたが、ヨハネ福音書の「ニコデモとの対話」の中でイエスは「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」(ヨハネ 3・5)と述べています。

両方比べると、「聖霊」と「霊」は同じですが、「火」と「水」は対応しません。ですが「水」を、「イエスが触れた水」「祝福された水」と考えると、うまく対応すると思います。「火」「イエスが触れた水」どちらも「すべてを清める力」だからです。

あらためて福音朗読箇所に戻ると、洗礼者ヨハネの洗礼を受けたあと、聖霊がイエスに触れ、また「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という父なる神の声が、イエスに触れました。三位一体の神の全体が、ここで表されています。洗礼者ヨハネの洗礼で使命はヨハネからイエスに託されました。これからイエスは、「聖霊と火で」また「水と霊によって」人々を神に立ち帰らせていきます。

イエスによって、すっかり新しい時代に入りました。イエスはこれまでの時代と、これからの時代を担っていきます。イエスに付き従うた

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

め、私たちはまず父と子と聖霊の名による洗礼を受けました。私たちの洗礼は、三位一体の神が人に触れた最初の出来事です。「聖霊が鳩のように降って来た」「声が天から聞こえた」そういう特別なしるしはありませんが、実際には父と子と聖霊が、私たちに触れてくださった恵みの体験なのです。

イエスは水の中から上がられて、これからどこへ向かわれるのでしょうか。今週の朗読箇所直後は次のような書き出しになっています。「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。」(3・23) いよいよ、イエス様は神の救いの計画を前に進めるために先頭に立って行かれます。

「聖霊と火によって」あるいは「水と霊によって」洗礼を受けた私たちも、態度を決めなければなりません。イエスに信頼して、示された道を共に歩むなら、イエスもこれからの人生を共に歩んでくださいます。重要な場面ではイエスは私たちに触れて、共にいることを分からせてくださいます。

年間第2主日(マルコ 2:18-22)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。